

イギリス・ルネサンスにおける「クレオパトラ文学」 ——シェイクスピアのクレオパトラとその姉妹たち

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻
表象文化論博士課程 2 年
日本学術振興会特別研究員
北村 紗衣

ウィリアム・シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』

ヒロインであるクレオパトラの特徴的な性格造形¹

クレオパトラ…ヨーロッパの文芸において伝統的に人気のある題材

シェイクスピアはクレオパトラをゼロから作り出したわけではない。

→シェイクスピアのクレオパトラは、古代からイギリス・ルネサンスの先行作品に登場するクレオパトラたちとどのような共通点を有し、またどのような点で異なっているのか？

ヨーロッパの「クレオパトラ文学」における『アントニーとクレオパトラ』の位置づけ

1. 古代のクレオパトラ

・『アントニーとクレオパトラ』の主な種本…古代の文献²

M. L. Williamson…古代の文献はクレオパトラの物語を政治史の枠組みでとらえ、恋愛の要素を描かなかつたと指摘(19)。

・古代の詩歌…クレオパトラの役柄は小さい。

ウェルギリウス『アエネーイス』(8.688)³

オウィディウス『変身物語』(929-31)…アーサー・ゴールディング訳

ルーカーヌス『ファルサリア』(1627年にトマス・メイの英訳)

引用 1：“The staine of Ægypt”「エジプトの面汚し」(10.70-1)

ホラーティウス『歌章』第 1 巻第 37 歌、通称“Cleopatra Ode”⁴

引用 2：“fatale monstrum”「破滅をもたらす怪物」(21)

引用 3：“non humilis mulier”「卑しからぬ女」(32)

→称賛と非難

・古代の歴史書

アッピアノス『内乱記』英訳(1579)

引用 4：“hee did all things as Cleopatra woulde have him, without respecte of God”「神への尊敬も払わず、クレオパトラがしてほしがることを全てやった」(310)

¹ クレオパトラの性格造形を称賛した批評としては、Coleridge, vol. 2, 143; Hazlitt 228; Swinburne 188-89; Bloom 546 などがある。

² シェイクスピアの種本全般については Bullough, ch. 2; Muir, *Shakespeare's Sources* 201-18; Muir, *The Sources of Shakespeare's Plays* 220-37; Spevack; Dickey, ch. 10-11; and Farnham, ch. 4 を参照。

³ これ以降、引用した作品の版については全てビブリオグラフィの記載を参照。なお、本発表における引用の日本語訳は全て拙訳である。

⁴ 『アントニーとクレオパトラ』と“Cleopatra Ode”の関連については Westbrook も参照。

フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』トマス・ロッジの英訳(1602)

引用 5: “the woman of greatest note & nobility of that time” 「当時最も著名で高貴な女」(386)

引用 6: “and being in her owne nature inclined to covetousness, shee abstained from no kinde of corrupt dealing and wickednesse” 「生来強欲な傾向があるがゆえに、いかなる種類の墮落した行いも悪行も慎むことはなかった」(388)

引用 7: “[Antonius] whom without all doubt she would forsake, if any occasion or necessitie should enforce him to make triall of her friendship” 「もし何かのきっかけや必然によってクレオパトラの友誼が試されざるを得ないような状況になれば、疑いなく彼女は[アントニーを]見捨てるだろう」(389)

プルタルコス『英雄伝』トマス・ノースの英訳(1579年以降)

引用 8: “a queen that for power and nobility of blood, excelled all other kings in her time, but Arsaces” 「高貴な血筋と権力において、その時代ではアルサケスを除いて他の全ての王に抜きんでる女王」

引用 9: “and moreover made himself so great” 「さらにずっと偉大な存在になった」(120)

オンファレとヘラクレスの喩え(319)

→アントニーとクレオパトラの両義的な関係

・シェイクスピアとプルタルコスの比較

プルタルコスのクレオパトラ…オクテーヴィアに美で劣る(79)。

シェイクスピアのクレオパトラ…オクテーヴィアよりも美しい⁵。

プルタルコスのオクテーヴィア…雄弁で、2人の娘の母(282)。

シェイクスピアのオクテーヴィア…子供がいない(III. xiii. 106-9)。

引用 10: “cold, and still conversation” 「冷たく、口数が少ない」(II. vi. 122-3)

リンダ・フィッツ…シェイクスピアはプルタルコスよりもはるかにクレオパトラの人物像に興味を抱いていたと指摘(195)。

→『アントニーとクレオパトラ』のクレオパトラは、古代の文献を種本にしているにもかかわらず、古代のクレオパトラ像から大きく逸脱するところがある。

シェイクスピアがクレオパトラの性格に加えた変更のうち、古代以降に起こった一般的なクレオパトラ像の変化に起因するものはどの程度あるのか？また、シェイクスピアが独自に施した変更はどのようなものか？

⁵ *Antony and Cleopatra* (以下 AC), II. vi. 122-31 及び III. iii. 11-41. 引用は全てリヴァーサイド第2版による。

2. 中世・ルネサンスのクレオパトラ

中世後期からルネサンスのクレオパトラ文学…恋物語

・イタリア・ルネサンスのクレオパトラ…過度な愛によって滅びた女
ダンテ『神曲』(地獄編 V. 63)

ペトラルカ『幸と不幸の治療』第2巻19番「無情な妻について」

ボッカチオ『名婦列伝』(*De Mulieribus Claris*)第88章

引用 11: “nulla fere, nisi hac et oris formositate, vere claritatis nota refulsit, cum e contrario avaritia crudelitate atque luxuria omni mundo conspicua facta sit” 「このような祖先と美しい顔以外に、彼女を輝かせる栄光のしるしはほとんど全くなく、反対に強欲と残忍と贅沢で世界中に名を馳せた」

引用 12: 「異教の昔から個々の女たちの人生を集めた著作をものすことにより『(他者という)女性』を刻みつけること」(ヘイマー 30)

・中世イギリスのクレオパトラ文学

チョーサー『善女物語』(*The Legend of Good Women*)

第1歌「エジプト女王たる殉教者クレオパトラの物語」⁶

クレオパトラ…アントニーの「妻」“wif”(615)

引用 13: “that shal ben wel sene, / Was nevere unto hire love a trewer queen” 「自らの愛にこれほど忠実であった女はいなかったとよくわかるだろう」(694-5)

引用 14: “Now, or I fynde a man thus trewe and stable, / And wol for love his deth so frely take, / I preyre God let oure hedes nevere ake!” 「これほど忠実にして堅固で、愛のために惜しげもなく死を選ぶ者を見つける前に、神よ、我々の頭が痛まないようにしてくださいませよう！」(703-5)

→称賛のみならず驚き呆れる感情

ジョン・ガワー『恋する男の告白』

“the wofull queene” 「いたましき女王」(VIII. 2572)⁷

ジョン・リドゲイト

Temple of Glas…アントニーのクレオパトラに対する愛(778-9)

“A Valentine to Her that Excelleth All”…クレオパトラのアントニーに対する愛 (*Minor Poems*, Part I, 60)

アッピアノス『内乱記』英訳版補遺“Continuation of Appian of Alexandria”

クレオパトラはアントニーの「妻」(395)

引用 15: 「[クレオパトラは]良き女になるものの、自らの命で評判を回復するためのつけを払わねばならない」(ヒューズ=ハレット 168)

⁶ チョーサーの引用は全てリヴァーサイド版第3版による。シェイクスピアと『善女物語』に関しては Schanzer の“*Antony and Cleopatra*” and “*The Legend of Good Women*”及び Thompson 第3章を参照。

⁷ *Confession Amantis*, 547. ガワーの引用は全て *The Complete Works of John Gower*, vol. 3 による。なお、解釈にあたっては日本語訳『恋する男の告解』も参照した。

3. イギリス・ルネサンスのクレオパトラたち

・執筆年代

- 1578年 ロベール・ガルニエ(Robert Garnier)が『マルク・アントワーヌ』(*Marc Antoine*)をフランス語で著す。
- 1592年 メアリ・シドニー(Mary Sidney)がガルニエの作品を英訳(以下、この英訳を『アントニウス』と呼称)。⁸
- 1594年 サミュエル・ダニエル(Samuel Daniel)が『アントニウス』の影響を受け、『クレオパトラ』(*Cleopatra*)を書く。⁹
- 1598年 サミュエル・ブランドン(Samuel Brandon)が『淑徳の誉れ高きオクテーヴィア』(*The Virtuous Octavia*, 以下『オクテーヴィア』)を書く。¹⁰
- 1603-9年頃 エリザベス・ケアリ(Elizabeth Cary)が『麗しきユダヤの女王メアリアムの悲劇』(*The Tragedy of Mariam, The Fair Queen of Jewry*, 以下『メアリアム』)を書く。
※この作品は一度も上演されず、『アントニーとクレオパトラ』より後の1613年に出版されたが、原稿の状態で様々な読者に読まれていたと考えられている。¹¹
- 1606-7年頃 ウィリアム・シェイクスピアが『アントニーとクレオパトラ』を書く(NeillによるOxford版22ページの注を参照)。

○美貌と気まぐれさ

『アントニーとクレオパトラ』、『アントニウス』、『クレオパトラ』、『オクテーヴィア』、『メアリアム』全ての作品がクレオパトラの美貌に言及。

・クレオパトラの美貌…厄災の元

ガルニエ作、シドニー訳『アントニウス』のクレオパトラ(以下「ガルニエ=シドニーのクレオパトラ」と表記)

引用 16 : “My face too lovely caused my wretched case” 「あまりに美しい我がかんばんせのせいで私の境遇は惨めになってしまった」(II. 437)

⁸ メアリ・シドニーの作品からの引用及び作品名・人物名等の表記は全て Hannay, Kinnamon and Brennan 編の *Selected Works of Mary Sidney Herbert, Countess of Pembroke* に拠る。『アントニウス』のシェイクスピアに対する影響に関しては Schanzer, “*Antony and Cleopatra*” and The Countess Pembroke’s “*Antonius*” 及び Brower 346 を参照。

⁹ ダニエルがメアリ・シドニーから受けた影響に関しては Rees, *Samuel Daniel* 第3章を、ダニエルがシェイクスピアに与えた影響については Norman や Seronsy 及び Craig 272 を参照。またダニエルが1607年に『クレオパトラ』を改訂した際に逆に『アントニーとクレオパトラ』を参照した可能性については Rees, “An Elizabethan Eyewitness of *Antony and Cleopatra*?” を参照。

¹⁰ ブランドンとシェイクスピアの類似については Chambers, vol. 1, 478 を参照。

¹¹ この点については Elizabeth Cary, *The Tragedy of Mariam, The Fair Queen of Jewry with The Lady Falkland: Her Life* に収録されている、編者の Weller と Ferguson による Introduction 5-6 が詳しい。『メアリアム』の引用は全てこの版による。『メアリアム』と『アントニーとクレオパトラ』のどちらが先に執筆されたかははっきりしないが、Brashear は『メアリアム』が先に執筆され、シェイクスピアが『オセロー』及び『アントニーとクレオパトラ』を書く前にこの作品を読んでいたと推定している。

ダニエルのクレオパトラ…美貌が何の役にも立たないと嘆く(III. 1081-9)。
→『アントニーとクレオパトラ』にはこうした場面はない。

・クレオパトラの後悔

ガルニエ=シドニーのクレオパトラ

アクティアムの“my shameful flight”「恥ずべき逃亡」(II. 443)を後悔。
無謀な戦闘を試みて失敗したのは自分の責任だと語る(II. 459)。
誤報を流してアントニーを死なせたことを悔いる(V. 1810-41)。

ダニエルのクレオパトラ

引用 17 : “Is’t I would have my frailty so belide, / That flattery could
perswade I was not I?” 「へつらいによって自分が自分でないなどと
説得されてしまうほどに、私は自らの弱さを覆い隠していたものな
のか？」(I. 35-6)

シェイクスピアのクレオパトラ

アクティアムの海戦について自らに責任がないことを確認する(III. xiii. 1-13)。
アントニーの自殺についてもほとんど反省の色を見せない。

・気まぐれさ

シェイクスピアのクレオパトラ…きわめて気まぐれ
先行するクレオパトラ劇からの影響

『アントニーとクレオパトラ』第3幕第3場

嫉妬からオクテーヴィアのことを事細かに尋ねるクレオパトラに対して、
使者がその容姿をことさら不器量に報告する。

ブランドン『オクテーヴィア』

オクテーヴィアに味方するローマの女性ユリアとカミラがクレオパトラの
容姿を気にし、それに対してゲミナスが女たちに阿る(V.1933-50)。
→恋敵の容姿を気にして使者を質問攻めにする女とそれに阿る使者

『メアリアムの悲劇』

メアリアムの不貞を疑ったヘロデが妻の処刑を命じるがすぐに後悔する。

引用 18 : “What? lives my Mariam? Joy, exceeding joy!” 「なんと？我がメア
リアムは生きているのか？喜ばしい、大変喜ばしい」(V. i. 13)

引用 19 : “I prithee tell no dying-tale” 「お願いだから死んだとかいうような
話はするな」(V. i. 17)

『アントニーとクレオパトラ』

アントニーの結婚を知らせるため送られてきた使者に対して、アントニーは
死んだとわざと早合点してクレオパトラが騒ぐ(II. v. 26-7)。

→主君が使者を勝手に遮って騒ぐモチーフ

クレオパトラの気まぐれさは欠点か魅力か？

→「問題劇」としての『アントニーとクレオパトラ』¹²

○愛と家庭

・ガルニエ=シドニーのクレオパトラ

「愛しの夫」“dear husband”(V. 1830)に対する愛

第2幕では、夫の後を追って死ぬと言って取り乱す。

夫の死後も「あなたの妻、あなたの友」“thy wife, thy friend”(V. 1973)

妻の役割と母の役割→最終的には夫への愛を優先(II. 562-563)

子供達を守るため自殺を思いとどまるよう説得されるが、死を選ぶ(V)。

→良き妻ではあったが、良き母にはなれなかったクレオパトラ

・ダニエルのクレオパトラ

引用 20 : “My selfe will bring my soule to Antony” 「アントニーのもとに我が魂を自ら運ぶ」 (V. 1187)

引用 21 : “This precious Gem, the chiefest that I have, / This jewell of my soule I value most” 「この貴重な宝石、私が持つ最高のもの、私が一番大事にしている我が魂の宝」 (III. 870-81)。

引用 22 : “God revenge th’innocent” 「神は無垢の子の恨みを晴らしてくれる」 (III. 1062)

引用 23 : “that with bloody hand / Cutt’s off succession” 「血まみれの手で継承を断ち切った」 (III. 1029-30)

→忠実な妻であると同時に愛情深い母でもあるクレオパトラ

・シェイクスピアのクレオパトラ

主役の2人が正式に結婚していない(II. ii. 122)。

子供への言及が少ない。

→結果的に、政治と恋愛という二つの軸が強調される。

クレオパトラが母としての側面を見せるのは、アントニーの死後。

息子への王位継承をオクテーヴィアスに嘆願する(V. ii. 18-9)。

蛇を赤ん坊に見立てる(V. ii. 309)。

○政治家としてのクレオパトラ

・ガルニエ=シドニーのクレオパトラ

オクテーヴィアスのローマ凱旋に関してユーフロンとの会話でわずかにほのめかす以外(V. 1852-3)、エジプトの政情にほとんど言及しない。

¹² 問題劇の定義に関しては Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare* の6ページを参照。

・ダニエルのクレオパトラ

女王としての役割と母・妻としての役割の齟齬

引用 24 : “And I must be a Queene, forget a mother; / Though mother would

I be, were I not I” 「私は母を忘れて女王にならねばならない。たとえ私が私ではなかったとしても、私は母であるのに」 (I. 96-7)

女王としての自覚(III. ii. 667; V. i. 1199)

「女王らしく死ぬ」決意(III. 1199; V. ii. 1662)

→一時の情熱に溺れ、祖国を窮地に

引用 25 : And Cleopatra now,
Well sees the dangerous way
She tooke, and car'd not how,
Which led her to decay.
And likewise makes us pay
For her disordered lust,
The int'rest of our blood

そして今やクレオパトラは
自ら選び、どうなるか気にもかけなかった
危険な道をよく知っている。
その道のせいでクレオパトラは墮落したのだ。
そしてまた彼女の乱れた欲望のせいで
我らは自らの血というつけを払わされるのだ。(Cleopatra, I. 221-6)

→無責任ゆえに失敗した政治家

・ケアリの『メアリアム』におけるメアリアムとクレオパトラの対比

政治的野心のないメアリアムが、自分はクレオパトラのように生きるより「純粋な体」“purest body”(I. ii. 201)を守りたいと答える。

→“purest body”と、後の場面でコーラスによって批判される“common body”(III. iii. 143)の対比

“common”の二重の意味…「淫ら」と「公的」

“common body”…「公的な肉体」であり「淫らな肉体」

→女性が公的であることは淫らであることとほぼ同義。

引用 26 : 「ユダヤの王妃という君主であるよりはむしろ乳搾り女であったほうがどんなにいいか」 “had I rather much a milkmaid be, / Than be the monarch of Judea's queen”(I. i. 57-8)¹³

¹³ この台詞に見られるエリザベス 1 世の演説の影響については、J. E. Neale, vol. 1, 366 も参照。

→私的領域に身を置くことで“common”であることを避け、貞淑であろうとするメアリアム

・シェイクスピアのクレオパトラ

「見世物をやるような公共の場で」“I’th’ common show-place”(III. vi. 12)権力を誇示する女性

引用 27:「乳搾りや雑用をする娘と同じ無惨な情念に駆り立てられ、私はもう女王ではないただの女になってしまった」“No more but [e’en] a woman, and commanded / By such poor passion as the maid that milks / And does the meanest chares”(IV. xv. 72-5)¹⁴

→女王という公的立場に執着するクレオパトラ

乳搾り女という私的存在であることを肯定的に捉えるメアリアムとは逆の姿勢を示している¹⁵。

形式的には未婚女性であるというクレオパトラのセクシュアリティ
政治的行為としての恋愛

外交の場で報償として口づけをちらつかせる(II. v. 29; III. xiii. 75)。

魅力と雄弁でドラベッサを圧倒して情報を引き出す(V. ii. 198-206)。

→『アントニーとクレオパトラ』において、クレオパトラの政治家としての立場は恋する女としての立場と齟齬をきたすのではなく、調和するものとして描かれている。

・クレオパトラの政治性と執筆当時の政情

ダニエルの『クレオパトラ』…エリザベス 1 世の晩年に書かれる。

老いた女王の政権に対する不安¹⁶

→1603 年以降のエリザベス 1 世に対する郷愁(A・バートン)

『アントニーとクレオパトラ』におけるエリザベス 1 世の追悼と顕彰¹⁷

エリザベス 1 世…政治の場で未婚女性としての立場を活用 (Greenblatt 164-9)。

○まとめ

シェイクスピアにおける政治劇と恋愛劇の融合

¹⁴ この類似は Weller and Ferguson も 154 ページで指摘している。

¹⁵ 『メアリアム』も『アントニーとクレオパトラ』同様『ユダヤ古代誌』を種本としている。この点については Straznický¹⁰⁷ 及び Newdigate 87-90 参照。

¹⁶ この点については佐藤達郎「サミュエル・ダニエルのクレオパトラ——エリザベス表象に関する一考察」を参照。

¹⁷ この点については Morris; Rinehart; Muir, “Elizabeth I, Jodelle, and Cleopatra”; Tennenhouse 146 及び佐藤「クレオパトラと過去の幻影」及び『アントニーとクレオパトラ』と「エリザベス一世への追悼歌」などを参照。

・参考文献

- Appian of Alexandria. *An Auncient Historie and Exquisite Chronicles of the Romanes Warres, Both Civile and Foren*. Trans. W. B. London, 1578.
- Barton, Anne. "Harking Back to Elizabeth: Ben Johnson and Caroline Nostalgia." *ELH* 48 (1981): 706-31.
- Bloom, Harold. *Shakespeare: The Invention of the Human*. New York: Riverhead Books, 1998.
- Boccaccio, Giovanni. *Famous Women*. Ed. and trans. Virginia Brown. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2001.
- Brandon, Samuel. *The Virtuous Octavia*. Oxford: Malone Society, 1909.
- Brashear, Lucy. "A Case for the Influence of Lady Cary's *Tragedy of Mariam* on Shakespeare's *Othello*." *Shakespeare Newsletter* 26 (1976): 31.
- Brower, Reuben A. *Hero and Saint: Shakespeare and the Graeco-Roman Heroic Tradition*. Oxford: Clarendon Press, 1971.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. 5. London: Routledge, 1964.
- Cary, Elizabeth, Lady Falkland. *The Tragedy of Mariam, The Fair Queen of Jewry with The Lady Falkland: Her Life*. Ed. Barry Weller and Margaret W. Ferguson. Berkeley: University of California Press, 1994.
- Chambers, E. K. *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems*. 2 vols. 1930; Oxford: Clarendon Press, 1963.
- Chaucer, Geoffrey. *Riverside Chaucer*. 3rd ed. Ed. Larry D. Benson. New York: Houghton Mifflin, 1987 [*Love Visions*. Trans. Brian Stone. London: Penguin Books, 1983. 『善女物語』宮田武志訳、市民文化会、1954].
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Literary Remains*. Vol. 2. London: Oickering, 1836.
- Craig, Hardin. *An Interpretation of Shakespeare*. New York: Citadel Press, 1948.
- Daniel, Samuel. *The Complete Works in Verse and Prose*. Ed. Alexander B. Grosart. 4 vols. Ann Arbor: University Microfilms, 1963.
- Dickey, Franklin M. *Not Wisely But Too Well: Shakespeare's Love Tragedies*. California: Huntington Library, 1966.
- Farnham, Willard. *Shakespeare's Tragic Frontier: The World of His Final Tragedies*. Oxford: Blackwell, 1973.
- Fitz, Linda T. "Egyptian Queens and Male Reviewers: Sexist Attitudes in 'Antony and Cleopatra' Criticism." *Shakespeare Quarterly* 28 (1977): 297-316. Rpt. in *Antony and Cleopatra: New Casebooks*. Ed. John

- Drakakis (London: Macmillan, 1994. 182-211.
- Garnier, Robert. *Marc Antoine; Hippolyt*. Ed. Raymond Lebègue. Paris: Les Belles Lettres, 1974.
- Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-fashioning: From More to Shakespeare*. Chicago: University of Chicago Press, 1980.
- Gower, John. *The Complete Works of John Gower*. Ed. G. C. Macaulay. 4 vols. Oxford: Clarendon Press, 1901 [『恋する男の告解』伊藤正義訳、篠崎書林、1980].
- Hamer, Mary. *Signs of Cleopatra: History, Politics, Representation*. London: Routledge, 1993.
- Hazlitt, William. *The Round Table, Characters of Shakespeare's Plays, A Letter to William Gifford, Esq.* London: Dent, 1902.
- Horace. *Odes and Epodes*. Ed. Niall Rudd. The Loeb Classical Library. Cambridge, MA.: Cambridge University Press, 2004.
- Hughes-Hallett, Lucy. *Cleopatra: Queen, Lover, Legend*. 2nd ed. London: Pimlico, 2006.
- Josephus, Flavius. *The Famous and Memorable Works of Josephus, a Man of Much Honour and Learning among the Jewes*. Trans. Thomas Lodge. London, 1602.
- Lucan. *Lucan's Pharsalia: Or The Civill Warres of Rome, betweene Pompey the Great, and Julius Cæsar*. Trans. Thomas May. London, 1627.
- Lydgate, John. *Minor Poems*. Ed. Henry Noble MacCracken. 2 vols. London: Early English Text Society, 1961.
- . *Temple of Glas*. Ed. J. Schick. New York: Kraus Reprint, 1975.
- Morris, Helen. "Queen Elizabeth I 'Shadowed' in Cleopatra." *Huntington Library Quarterly* 32(1969): 271-78.
- Muir, Kenneth. *Shakespeare's Sources*, 2 vols. London: Methuen, 1957.
- . "Elizabeth I, Jodelle, and Cleopatra." *Renaissance Drama* 1 (1968): 197-206.
- . *The Sources of Shakespeare's Plays*. London: Methuen, 1977.
- Neale, J. E. *Elizabeth I and Her Parliaments*. 2 vols. London: Jonathan Cape, 1953-56.
- Neill, Michael, ed. *The Tragedy of Anthony and Cleopatra*. William Shakespeare. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Newdigate, Bernard H. *Michael Drayton and His Circle*. Oxford: Blackwell, 1961.
- Norman, Arthur M. Z. "Daniel's *The Tragedie of Cleopatra and Antony and*

- Cleopatra.* *Shakespeare Quarterly* 9 (1958): 11-18.
- Ovid. *Shakespeare's Ovid, Being Arthur Golding's Translation of the Metamorphoses*. Trans. Arthur Golding. Ed. W. H. D. Rouse. London: De La More, 1904.
- Pembroke, Mary Sidney Herbert, Countess of. *Selected Works of Mary Sidney Herbert, Countess of Pembroke*. Ed. Margaret P. Hannay, Noel J. Kinnamon and Michael G. Brennan. Tempe: Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies, 2005.
- Petrarch, Francesco. *Prose*. Ed. G. Martellotti. Milan: Ricciardi, 1955 [*Petrarch's Remedies for Fortune Fair and Foul*. Trans. Conrad H. Rawski. 5 vols. Bloomington: Indiana University Press, 1991].
- Plutarch. *Plutarch's Lives*. 10 vols. Trans. Thomas North. London: Dent, 1898-99.
- Rees, Joan. "An Elizabethan Eyewitness of *Antony and Cleopatra*?" *Shakespeare Survey* 6 (1953): 91-93.
- . *Samuel Daniel: A Critical and Biographical Study*. Liverpool: Liverpool University Press, 1964.
- Rinehart, Keith. "Shakespeare's Cleopatra and England's Elizabeth." *Shakespeare Quarterly* 23 (1972): 81-86.
- Seronsy, Cecil C. "Shakespeare and Daniel: More Echoes." *Notes and Queries* 205 (1960): 328-29.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Gen. ed. G. Blakemore Evans. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin, 1997.
- Schanzer, Ernest. "'*Antony and Cleopatra*' and The Countess Pembroke's '*Antonius*.'" *Notes and Queries* 201 (1956): 152-54.
- . "'*Antony and Cleopatra*' and '*The Legend of Good Women*.'" *Notes and Queries* 205 (1960): 335-36.
- . *The Problem Plays of Shakespeare: A Study of Julius Caesar, Measure for Measure, Antony and Cleopatra*. London: Routledge, 1963.
- Spevack, Marvin, ed. *Antony and Cleopatra: A New Variorum Edition of Shakespeare*. New York: Modern Language Association of America, 1990.
- Straznicky, Marta. "'Profane Stoical Paradoxes': *The Tragedy of Mariam* and Sidnean Closet Drama." *English Literary Renaissance* 24 (1994): 104-34.
- Swinburne, Algernon Charles. *A Study of Shakespeare*. London: Chatto, 1895.
- Tennenhouse, Leonard. *Power on Display: The Politics of Shakespeare's Genres*. New York: Methuen, 1986.

- Thompson, Ann. *Shakespeare's Chaucer: A Study in Literary Origins*.
Liverpool: Liverpool University Press, 1978.
- Virgil. *Virgil II: Aeneid 7-13, Appendix Vergiliana*, The Loeb Classical
Library. Ed. G. P. Goold and H. Rushton Fairclough. Cambridge, MA:
Harvard University Press, 2002.
- Westbrook, Perry D. "Horace's Influence on Shakespeare's *Antony and
Cleopatra*." *PMLA* 42 (1947): 392-98.
- Williamson, Marilyn L. *Infinite Variety: Antony and Cleopatra in
Renaissance Drama and Earlier Tradition*. Connecticut: Lawrence
Verry, 1974.

- 佐藤達郎「クレオパトラと過去の幻影——『アントニーとクレオパトラ』研究(1)」、
『山梨大学教育人間科学部研究報告』49 (1998): 29-37。
- 「『アントニーとクレオパトラ』と「エリザベス一世への追悼歌」——『ア
ントニーとクレオパトラ』研究(2)」、『山梨大学教育人間科学部紀要』1.1
(1999): 221-28。
- 「サミュエル・ダニエルのクレオパトラ——エリザベス表象に関する一
考察」*Shakespeare News* 43.3 (2004): 14-22。
- ダンテ・アリギエーリ『神曲』寿岳文章訳、全3巻、集英社、2004。